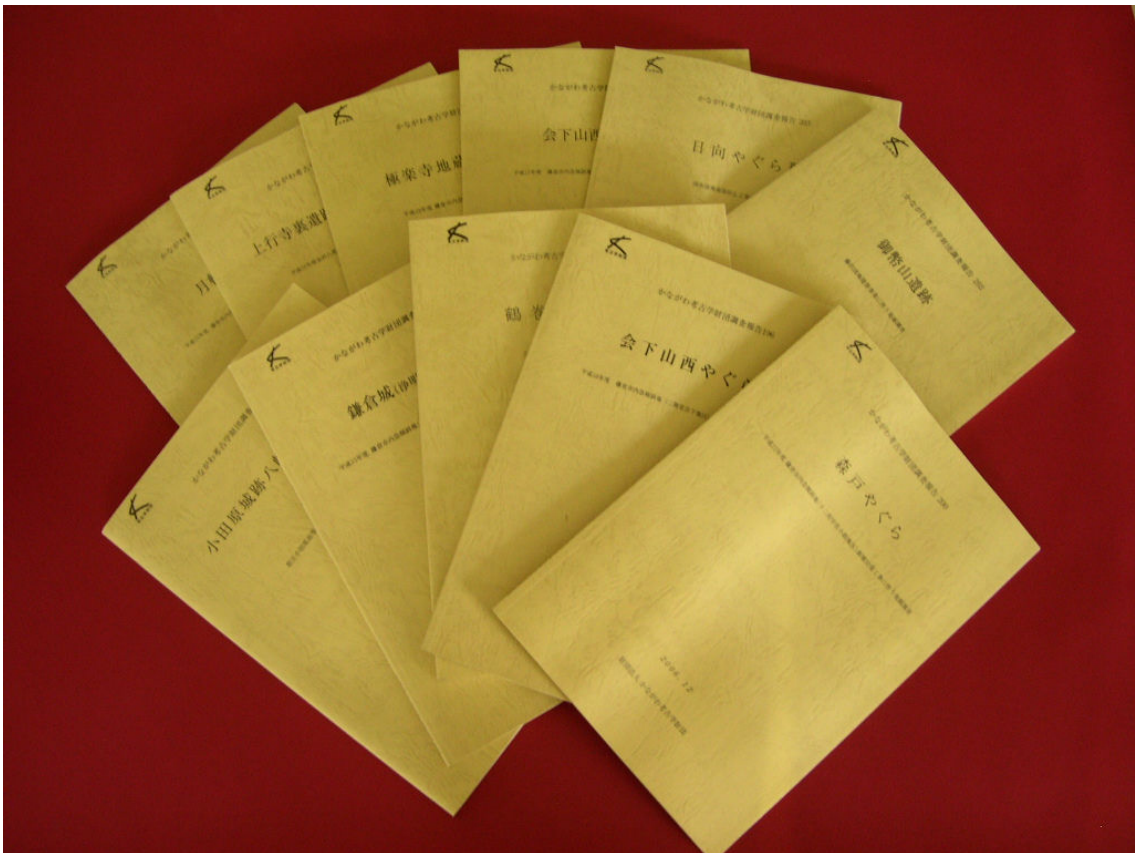


第4回 ようこそ考古学

発掘調査報告書の 読み方・調べ方

(財) かながわ考古学財団 依田亮一



2007. 11. 16(金) かながわ県民センター 会議室

発掘調査報告書を読む前に・・・

1. 「遺跡」とは？

遺跡とは、人類が登場して以来、現在に至るまでの累積した土地利用の痕跡(遺跡・遺構)とその内容を示す遺存物(遺物)を中心としたもので、次の3つの特性があります。

- (1)過去の**物質文化**を知ることが出来る。
- (2)**民衆の歴史**を明らかにすることが出来る。
- (3)どのような地域でも資料は残っており、**地域の歴史**を明らかにすることが出来る。

☆遺跡の残り方

各時代の土地利用や生活の痕跡は、タイムカプセルのように全て無傷のまま姿を現すことはまずありえない。残り方は場所によってさまざま。

→ある時代の生活の跡が良好に残されている場合、それはそれ以前の土地利用の痕跡を積極的に破壊している可能性があり、またその後の土地利用があまり大きな改変を伴うものではないことを意味する。

→このような状況が累積して、最終的な形として私たちの目の前に姿を現します。

考古学が遺跡と認識しているのは「大地そのもの」といえます

☆考古資料の性格(※第2回ようこそ考古学 小川岳人「考古学者の頭の中」資料参照)

遺物として呼んでいるものの大部分＝過去の人達の廃棄物(ゴミ)

過去に選択されながらも意識的に今日まで残された、伝世されたきた古文書・伝承を研究対象とする「文献史学」・「民俗学」とは、扱う資料の性格はこの点で異なります。

2. 「発掘調査」とは？

私たちが暮らしている地面の下には、過去に色々な原因(火山の噴火・洪水・客土等)で堆積した地層が幾重にも堆積しています。これらの地層の中には、現代から過去にわたってその土地で暮らした人々の生活の跡が残っている場所があり、その場所を「遺跡」と呼んでいます。発掘調査とは、現代から順次時間を遡りながら、累積したかつての土地利用痕跡を確認し、その内容を示すさまざまな情報を写真や図面に記録していく作業です。

通常、発掘調査は開発工事に伴って遺跡が破壊されてしまうことが原因で行われる緊急発掘調査と、学問上の問題を解明する学術資料を得るために行われる学術調査に分けられます(その他、遺跡の有無や広がりを確認する目的で行われる試掘調査・範囲確認調査もあります)。

3. 「発掘調査報告書」とは？

発掘調査報告書とは、発掘調査によって確認された色々な時代の遺構や遺物等の様々な情報を満載した資料集です。発掘調査の後、出土品整理作業(遺構図面・写真の整理、出土した遺物の洗浄・注記・分類・接合・復原・実測・写真撮影、原稿執筆・編集等)を経て、報告書は作成されます。この報告書が刊行されることによって、一つの遺跡に対する調査はひとまず終了し、得られた成果(資料)は地域住民・研究者等の共有の財産となります。

発掘調査報告書を読む(使う)にあたって・・・

1. 報告書の内容・構成

- ①表紙
- ②序文
- ③例言
- ④目次(挿図目次・表目次・写真目次)
- ⑤調査経緯
- ⑥遺跡の立地と環境
- ⑦調査経過
- ⑧基本層序
- ⑨発見された遺構と遺物
- ⑩自然科学分析
- ⑪まとめ(調査の成果と問題点・結語)
- ⑫写真図版
- ⑬抄録
- ⑭奥付

※第3回ようこそ考古学 新開基史「ようこそ弥生のムラへ」の題材となった横須賀市高尾横穴墓群・矢ノ津坂遺跡の調査報告書を例に見てみましょう。

2. 発掘調査報告書をもとに、資料を活用する

※報告書を手にも、実際に調査された場所に赴いて、出土した遺物を見て(触れて)みましょう

(1)現地に立ってみる

開発に伴う調査では、発掘調査した場所は既に道路や住宅等に化してしまっています。その為、調査の期間中に行われる現地説明会は、遺跡を直接見ることの出来る貴重な機会です。情報を収集し、足を運んでみて下さい。

また、調査が終了してしまった後でも、報告書を手にとり実際に調査が行われた付近に立ってみると、周囲の地形・景観から遺跡の置かれた環境を知ることが出来ます。

(2)遺物を見て(触れて)みる

出土した遺物や記録した図面・写真類は、大抵当該自治体の教育委員会で保管されています(神奈川県の場合は、県教育委員会の神奈川県埋蔵文化財センターで保管)。

「〇〇遺跡の報告書に載っている、〇〇の遺物が見たいのですが・・・」と、同センターに問い合わせをすれば、出土した遺物を直接見て、触れることが出来ます。また、学校の授業や地域のサークルの講演会・展示会等で資料の貸出も出来ます。報告書刊行によって得られた成果は、皆さんの共有の財産です。積極的にご活用ください。

今日のお話の参考になる文献

- 桜井清彦 1980 『学研の図鑑 遺跡・土器・石器』学習研究社
土井義夫 1995 「考古学資料論」『中世資料論の現在と課題』名著出版
服部敬史 1998 『発掘と整理の知識』東京美術出版